外国人及び日本人児童生徒の
多文化共生教育の充実に向けて

―― 外国人児童生徒等への学習支援ガイドブック
「ぐんまのかけはし」の作成を通して ――

長期研修員　　西口　仁　　渋澤　敏雄

《研究の概要》

本研究は、外国人及び日本人児童生徒が互いの多様性を受け入れ、共に活躍できる未来のための多文化共生教育の充実を目指したものである。昨年度、総合教育センター長期研修員が作成した「ぐんまのぐんぐんガイドー受入れ編・指導編ー」の内容を引き継いで、日本語中期指導プログラムや在籍学級での支援を紹介する、外国人児童生徒等への学習支援ガイドブック「ぐんまのかけはし」を作成した。この「ぐんまのかけはし」を活用することで、県内のどの地域の学校においても組織的・計画的な指導が可能になり、外国人及び日本人児童生徒が安心して共に学び、成長することができる多文化共生教育の充実につながると考える。

キーワード　**【多文化共生教育　日本語中期指導プログラム　日本語と教科の統合学習　授業のユニバーサルデザイン化　学級での多文化共生】**

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｇ１７－０２　令和３年度　２７６集

Ⅰ　主題設定の理由

国際化の進展に伴い、学校では外国人児童生徒や帰国児童生徒など、いわゆる「外国につながりのある児童生徒」（以下、外国人児童生徒等）の受入れが増えている。こうした児童生徒等の中には、日本語で日常会話ができても、教科学習には十分に参加できない児童生徒が多い。これは生活言語と学習言語の違いに起因するものであると考えられる。中央教育審議会「令和の日本型学校教育の構築を目指して」（答申）（令和３年１月26日）の中でも「外国人児童生徒等の母語についても多様化が進むなか、日本語の指導や教科の補習等の特別な指導を受けている児童生徒の割合は８割前後にとどまっており、外国人児童生徒等に対しては、学校生活に必要な日本語の学習とともに日本語と教科を統合した学習を行い、教科学習に自律的に参加できる力を養うなど、組織的かつ体系的な指導が必要である」とされている。

県では、令和２年１月、多文化共生・共創「群馬モデル」が施策化された。「群馬モデル」の内容の一つに「外国人及び日本人児童生徒が互いの多様性を受入れ、ともに活躍できる未来のための多文化共生教育の充実」がある。この「群馬モデル」実現に向けて令和元年度、外国人の子供等の就学に関する検討会が発足し、就学促進や教材作成などについての具体的な取組が始まった。外国人が多く住む地域（集住地域）を中心にこれまで積み重ねてきた情報や実践をまとめ、外国人の受入れ経験の少ない地域（散在地域）でも活用できるようにしている。「ぐんまの外国につながる子供たちの学び応援サイト・ハーモニー」の運用も始まっている。こうした取組を継続・発展させることで、外国人児童生徒等が日常生活のための日本語だけでなく、学習するための日本語を身に付けて在籍学級での授業に積極的に参加できる力を養い、義務教育段階の学力を十分に付けて高等学校教育を見据えることができるまでの指導が必要とされている。

昨年度の総合教育センター長期研修員は「外国人児童生徒等への学校生活支援ぐんまのぐんぐんガイドー受入れ編・指導編ー」を作成した。これは、外国人児童生徒等を初めて受け入れる学校でもすぐに対応できるよう必要な情報や日本語初期指導ぐんぐんプログラムを紹介しているガイドブックである。この「ぐんまのぐんぐんガイド」は、受入れ当初の指導や支援が中心であり、以降の指導や支援の充実を更に図る必要がある。

そこで、この「ぐんまのぐんぐんガイド」の内容を引き継ぎ、受入れ・日本語初期指導から教科指導へつなげていく支援を紹介する新たなガイドブック「ぐんまのかけはし」を作成することとした。日本語初期指導から在籍学級での教科指導につなげていく「架け橋」となる手立てや実践は、県内の外国人集住地域や各都道府県において、これまでにもいくつか見受けられる。日本語と教科の統合学習（ JSLカリキュラム）やリライト教材、やさしい日本語などがそれである。また、特別支援教育の視点やユニバーサルデザインの視点も外国人児童生徒等にとっては個別の配慮となり得ることが指摘されている。さらに先行研究は未だ少ないが、 ICTの活用ができれば、外国人児童生徒等にとって大きな理解支援・表現支援・記憶支援のツールとなると思われる。

このガイドブックを活用することで、県内のどの地域の学校においても組織的・計画的な指導が可能になり、外国人及び日本人児童生徒が安心して共に学び、成長することができる多文化共生教育の充実につながることを願い、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

外国人及び日本人児童生徒の多文化共生教育の充実を目指して、県内のどの地域の学校においても、組織的・計画的な指導ができることを目的として、受入れ・日本語初期指導から教科指導へつなげていく支援を紹介する、外国人児童生徒等への学習支援ガイドブック「ぐんまのかけはし」を作成する。

Ⅲ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　「外国人及び日本人児童生徒の多文化共生教育の充実」とは

外国人及び日本人児童生徒とは、外国人児童生徒と、帰国児童生徒や日本国籍を有しているが、外国につながりのある家庭で育ち日本語指導が必要な児童生徒を含めた学校に在籍する全ての子供たちを指している。多文化共生教育の充実とは、外国人及び日本人児童生徒が互いの多様性を受け入れ、共に活躍できる未来のための教育の充実を指す。県内のどの地域の学校においても、教職員が組織的・計画的な指導を行うことによって外国人児童生徒等と日本人児童が共に安心して学び、将来地域の一員として活躍できるようにする。

(2)　「外国人児童生徒等学習支援ガイドブック『ぐんまのかけはし』」とは

外国人児童生徒等を受け入れた後、日常生活に適応する日本語の力（生活言語）から在籍学級で学習をするための日本語の力（学習言語）につなげていくための支援を紹介したガイドブックである。個別授業での日本語指導を想定した「日本語指導編」と一斉授業での教科指導を想定した「在籍学級での指導編」の２本柱から構成されている。本ガイドブックを活用することで、外国人集住地域でも散在地域でも教職員が組織的・計画的な指導を行うことができるようにした。

2　研究構想図

３　作成物（ガイドブック「ぐんまのかけはし」の説明）　　別添資料参照

(1)　特徴

外国人及び日本人児童生徒の多文化共生教育の充実を目指して受入れ・日本語初期指導から教科指導につなぐ支援となるガイドブック（図１）を作成した。本ガイドブックの特徴は、以下の通り（図２）である。

①　日本語指導編の初めに、日本語指導の流れを説明

②　楽しい身近な日常活動を行いながら、教科につながる日本語を学べる日本語中期指導プログラム（動画付き授業案）を掲載

③　日本語と教科の学習を統合し、「日本語で学ぶ」力を育成

④　在籍学級での指導編で、外国人児童生徒等にも分かりやすい教科指導の例を紹介し、授業をユニバーサルデザイン化

⑤　ICTを活用した、個に応じた効率的な学習指導の例を掲載

⑥　学習の土台となる学級づくりでは学級での多文化共生を意識

図１　表紙

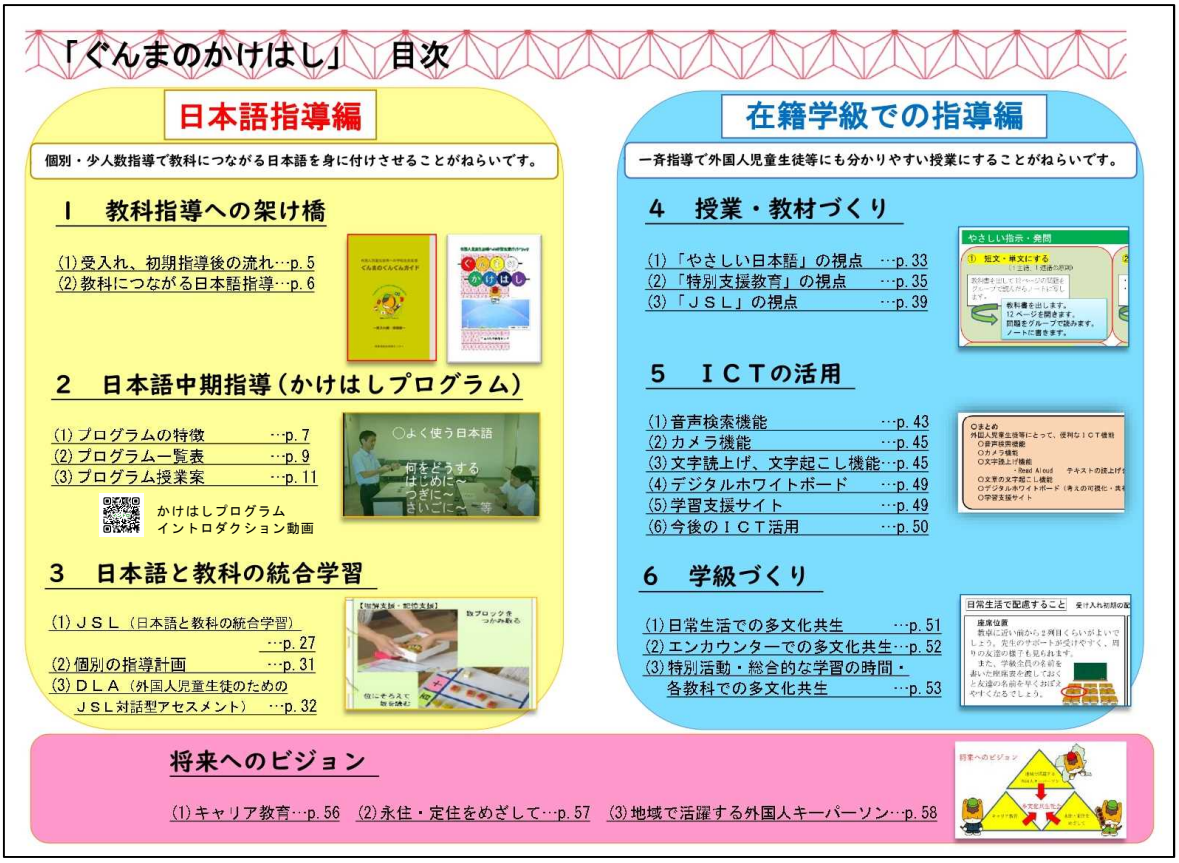


図２　目次

(2)　日本語中期指導（かけはしプログラム）

日常生活に適応する日本語の力（生活言語）から在籍学級での学習するための日本語の力（学習言語）につなげるための指導プログラム（次ページ図３、図４）である。日本語初期指導を終えたが、在籍学級での学習にはまだ主体的に参加することが難しい児童生徒を対象に、個別指導で行う。特徴として、一つの授業が15分×３のモジュール指導になっており、授業時間以外の朝学習などの時間にも行うことができる。また、題材が小学１・２年生の国語科・算数科・生活科と関連させた身近な内容であり、教室でよく使われる日本語を中心に指導することによって、学習するための日本語の力を効率よく身に付けることができる。さらに、それぞれのモジュールで「話す・聞く・読む・書く」の四つの力をバランスよく高めることができるようになっている。

授業のポイントは？

活動場面の動画（１～２分）を二次元コードで読み取れるようになっています。授業の進め方が短時間で分かるので、児童生徒に見せてもよいでしょう。

日本語指導と**国語・算数・生活科とを関連させた題材**を選んでいます。教科の予習や復習としても使えます。

教室でよく使われる指示・発問を取り入れています。
ＪＳＬカリキュラムのＡＵ（p.27 参照）を参考にしています。

買い物をしよう

教科との関連	算数・生活

よく使う日本語　いくつ（何こ／何本／何まい）？【数】
～をえらびました。～だからです。【理由】

基本的な流れ	指導のポイント
1 絵カードを使って買い物ごっこをする。（聞く・話す活動） 絵カードの表 りんご 100円 / ソフトクリーム 200円 / ラーメン 550円 絵カードの裏	○はじめは、先生が店員、児童が客の役をする。 **T:「りんごは、いくつ欲しいですか？」** S：「3つです。」 **T:「合わせて、いくらですか？」** S：「300円です。」 **T:「おつりは、いくらですか？」** ※高学年以上は、 ・絵カードにこだわらず、スーパーのチラシなどを使った買い物にする。 ・かけ算やわり算を使って値段を出す問題にする。（1個あたりの値段を出すなど） ※実態に応じて買い物に条件をつけた聞き方もある。 「りんごが5つだったら、どうでしょう。」 「りんごが50円なら、どうでしょう。」
2 絵カードに自分のほしい物を書く。（書く活動） 絵カードの表 本 100円 / くつ 800円 / ケーキ 320円 絵カードの裏	○表に自分がほしい物の絵、裏に文字・値段を書かせる。 **T：「何をえらびましたか？」** S：「本をえらびました。」 **T：「どうして本をえらびましたか？」** S：「本を読むことが好きだからです。」 ※高学年以上は、 ・家庭科の学習と関連させ、おこづかいの適切な使い方や調理の材料としての買い物を考えさせる。 ・「どうして」「なぜ」の質問に「なぜなら」「理由は」などと答えさせる。
3 自分で作った絵カードも使って買い物ごっこをする。（読む・話す活動） 	○1と同じ活動をする。店員と客の役を交代してもよい。 **「合わせて、いくらです。」** **「おつりは、いくらです。」** **「～と～をえらびました。～だからです。」** 更に発展させるなら、お金カードを使って、お金のやりとりを体験させるとよいでしょう。「おこづかい1000円をもって、買い物に行きましょう。何を選びますか？」など実態に応じて買い物ごっこを楽しめます。

特別支援教育デザイン研究会（http://sn1.e-kokoro.ne.jp/）よりダウンロードしました。

「高学年以上は」の欄を設け、児童の実態に応じて活用できます。

１モジュール15 分で行うことができます。

更に発展させるための**ヒントや留意点**を取り入れています。

話す・聞く・読む・書く力をバランスよく高めることができます。

図や写真、すぐに活用できる教材のリンクを取り入れています。

文型や文字の繰り返し練習ではなく、具体物を使った日常活動中心で楽しみながら取り組める内容になっています。活動と言葉がつながると、児童生徒にとって意味のある言葉となり習得も早くなります。

指導する際には、発音や文字の細かい間違いを指摘するのではなく、児童生徒が新しくできたことを認めていきましょう。

図３　日本語中期指導（かけはしプログラム）の特徴

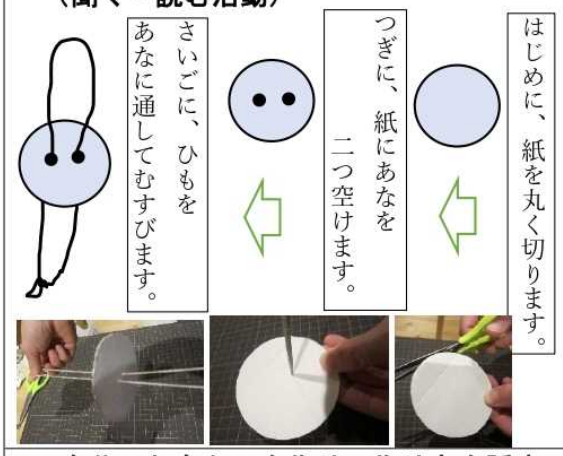
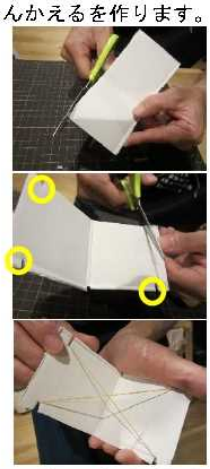
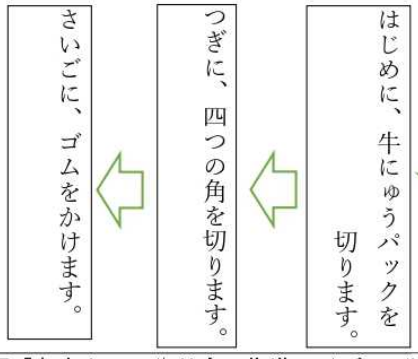
（3）　プログラム授業案

おもちゃを作ろう

教科との関連	国語・生活

※以下、授業案中の「よく使う日本語」は、小学校１・２年生で学習する漢字で表記してしています。

よく使う日本語　**何をどうします。【動作】**
はじめに～、つぎに～、さいごに～　【順序】

基本的な流れ	指導のポイント
1　先生のおもちゃ（ブンブンごま）の作り方を見たり聞いたりして作る。（聞く・読む活動）  	○厚紙・ひも・はさみ・きりを用意する。 **T:「はじめに、紙を丸く切ります。」** **T:「つぎに、紙に穴を２つ空けます。」** **T:「さいごに、ひもを穴に通して結びます。」** ○説明は短冊に書いておくと、文を読む力と書く力につながる。 ※高学年以上は、 ・半径５ｃｍの円、２つの穴の間は１ｃｍ、ひもの長さは60ｃｍなどと算数用語を使って説明する。 ※四角形や長方形のこまも用意して質問してみる。 「円じゃなくて四角形だったら、どうでしょう。」 「どうすればもっとたくさん回るでしょう。」
2　自分でおもちゃを作り、作り方を話す。（話す活動） ここでは例として、ぴょんぴょんかえるを作ります。 「はじめに、牛乳パックを切ります。」 「つぎに、４つの角を切ります。」 「さいごに、ゴムをかけます。」 	○作るおもちゃは、生活科の教科書などを参考にする。簡単なものでよい。作り方の動画を見せるとよい。 例として、ぴょんぴょんかえる、紙ひこうき、ストローひこうき、牛乳パックこま、紙コップけんだま、紙皿フリスビーなどがあります。 **T：「何を作りますか？」** S：「ぴょんぴょんかえるを作ります。」 **T：「はじめに、（つぎに、さいごに、）何をしますか？」** S：「はじめに、牛乳パックを切ります。」 S：「つぎに、４つの角を切ります。」 S：「さいごに、ゴムをかけます。」
3　自分で作ったおもちゃの作り方を書く。（書く活動）  	○短冊やワークシートにおもちゃの作り方を友達に分かるように順序よく書く。児童が作る様子を写真に撮っておくと、文を書きやすい。 ※手順が多い場合**「それから」「こんどは」**も使う。 ※おもちゃを２つ以上作って**「どちらが速く動く、高く、遠くとぶ」**などという日本語も使える。 ※高学年以上は、 ・材料や準備するもの ・作り方とその絵、写真 ・遊び方 なども加えて、段落も意識した作文形式で書かせる。

小２国語「おもちゃの作り方」指導アイデア（https://kyoiku.sho.jp/65358/）を参考にしました。

図４　日本語中期指導（かけはしプログラム）の授業案一例

(3)　在籍学級での指導

外国人児童生徒等が多くの時間を過ごすのが、在籍学級での一斉授業である。日本語の力が十分でない外国人児童生徒等にとって、他の児童生徒と同じように主体的・対話的に参加することが難しい状況である。そこで担任や教科担当の教員が、通常の授業に適切な配慮をすることで、外国人児童生徒等にも分かりやすく、参加しやすい授業にしていく必要がある。本ガイドブックでは、授業のユニバーサルデザイン化を目指して、やさしい日本語の視点・特別支援教育の視点（図５）・日本語と教科の統合学習（ JSLカリキュラム）の視点（次ページ図６）を取り入れた授業・教材づくりの例を紹介している。また、個に応じた効率的な学習指導となる ICTの活用例（次ページ図７）や学習を支える土台となる学級づくりの実践例も紹介している。こうした支援を取り入れることで外国人児童生徒等はもちろん、全ての児童生徒が安心して共に学べる多文化共生教育につながると考える。

図５　特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり一例

(3)　「ＪＳＬ」の視点

３章で紹介したＪＳＬ（日本語と教科の統合学習）は、特別な授業というわけではなく在籍学級の通常の授業に取り入れることができます。(1)やさしい日本語の視点(2)特別支援教育の視点と合わせて支援を取り入れることで、外国人児童生徒等だけでなく、日本人児童生徒にも分かりやすく参加しやすい、ユニバーサルデザイン化された授業になります。ここでは小学校国語と理科・中学校英語を例として取り上げますが、どの学年・教科でもＪＳＬの視点を取り入れることが可能です。

ＪＳＬ授業づくりのステップ

１　「教科の目標」と「日本語の目標」を考える

教科の目標を決めたら、**それを達成するためにはどんな日本語の力が必要か**を考えます。
必要な語彙や表現をおさえ、できるだけ具体的な言葉で「日本語の目標」を決めましょう。

教科の目標
主人公の気持ちの変化を想像できる。

日本語の目標
「～だった気持ちが、だんだん～になりました。」を使って、気持ちの変化を表現できる。

２　理解支援を考える

日本語の目標を決めてもただ文型に言葉を当てはめるだけでは目標の達成とはなりません。**その日本語の意味・考え方を理解でき、表現できて**目標達成となります。
その理解のために右のような様々な支援が考えられます。特に有効な支援は**実物による操作や視覚化**を豊富にすることです。

理解支援　一例です

- ◎ 言い換える：知っている言葉や母語などで言い換える。
- ◎ 視覚化する：実物、模型、絵、写真、図などを利用する。
- ◎ 操作する　：実物、模型、絵カードなどを動かす。
- ◎ 例示する　：具体的な例を示す。
- ◎ 対比させる：対になることばや事柄を示す。
- ◎ 明示する　：課題、手順、見通し、流れなどを明確に示す。
- ◎ 簡略化する：いくつかに分割、重要な点に絞り簡略化する。
- ◎ 整理する　：分かりやすく整理して示す。
- ◎ 補足する　：背景知識やことば、情報などを補う。
- ◎ 関連づける：事柄の関係性（因果関係、順次性等）を示す。

３　表現支援を考える

表現支援

図６　JSL（日本語と教科の統合学習）の視点を取り入れた授業づくり一例

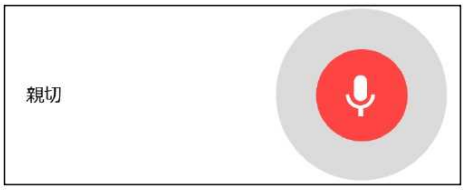
５　ＩＣＴの活用

Google Workspace for Education を使い、ＩＣＴ端末を活用した授業実践です。日本語の読み書きに困難のある外国人児童生徒等への個に応じた学習指導や支援ができます。

(1)　音声検索機能（Microsoft 社、Google 社）

従来から音声翻訳機が使われていますが、パソコンを使って同じように活用できます。

・Google 社のウェブブラウザを立ち上げ、マイクアイコンをクリックします。



・音声入力が始まるので、調べたい言葉を入力します。

※文章で音声入力もできますが、単語単位で入力する方がおすすめです。

・音声入力すると、図のようにその言葉の検索結果が表示されます。

・日本語での説明が分からないようであれば、“画像”を

図７　ICTの活用一例

Ⅳ　研究のまとめ

１　成果

○　外国人及び日本人児童生徒の多文化共生教育の充実を目指して、県内のどの地域の学校においても組織的・計画的な指導ができるように、外国人児童生徒等への学習支援ガイドブック「ぐんまのかけはし」を作成することができた。

○　日本語指導編では、日常生活に適応する日本語の力（生活言語）から教室で学習をするための日本語の力（学習言語）につなげるための日本語中期指導プログラムを作成することができた。モジュール指導で、題材が小学１・２年生の国語科・算数科・生活科と関連させた身近な内容であり、教室でよく使われる語彙や文型を中心に指導することで、学習するための日本語の力を効率よく身に付けることができるようにした。また、活動事例の動画も作成して分かりやすく示すことができた。

○　在籍学級での指導編では、外国人児童生徒等にも分かりやすく、参加しやすい授業にするために、授業のユニバーサルデザイン化につながる支援を紹介することができた。やさしい日本語の視点・特別支援教育の視点・日本語と教科の統合学習（ JSLカリキュラム）の視点を取り入れた授業・教材づくり、 ICTの活用、学習を支える学級づくりなどの支援は、外国人児童生徒等はもちろん、全ての児童生徒にとっての支援となり得る。

２　課題

○　外国人児童生徒等への指導に対する教職員の更なる意識向上に向け、ガイドブック「ぐんまのかけはし」を群馬県教育委員会「ぐんまの外国につながる子供たちの学び応援サイト・ハーモニー」に掲載したり研修会等で周知したりして、広く活用してもらい、改善を進める必要がある。

Ⅴ　提言

本研究で作成したガイドブック「ぐんまのかけはし」を活用して、日本語指導では教科につながる日本語を明確にして指導すること、在籍学級では授業のユニバーサルデザイン化を意識して指導することで、全ての児童生徒が分かりやすく、安心して共に学ぶことができるようにする。

＜参考文献＞

・文部科学省総合教育政策局国際教育課　『外国人児童生徒受入れの手引き』　　明石書店(2019)
・齋藤　ひろみ、今澤 悌、内田 紀子、花島 健司　著　『外国人児童生徒のための支援ガイドブック～子どもたちのライフコースによりそって～』　　凡人社（2011）
・松尾　知明　著　『多文化クラスの授業デザイン』　　明石書店（2021）
・菊池　聡　著　『学級担任のための外国人児童指導ハンドブック』　　小学館（2021）
・池上　摩希子、大蔵　守久　編著　『子どもといっしょに！日本語授業おもしろネタ集１・２』　凡人社（2001,2005）
・佐藤　郡衛　監修、齋藤　ひろみ、今澤　梯、池上　摩希子、大蔵　守久 著　『小学校「JSL国語科、社会科、算数科、理科」の授業作り』　　スリーエーネットワーク（2005）
・阿部　利彦、川上　康則、片岡　寛仁、上條　大志、久本　卓人　著　『通常学級のユニバーサルデザイン　プランzero２』　　東洋館出版社（2015）
・国分 康孝、岡田 弘 編著　『エンカウンターで学級が変わる（小学校編）』図書文化社（1996）

＜担当指導主事＞

太田　紀子　　新井　浩史